

Title	アンドレ・ジイド作品における日記の力
Sub Title	Le pouvoir du journal chez André Gide
Author	森, 香織(Mori, Kaori)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2014
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.19, (2014. ) ,p.17- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20141201-0017">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20141201-0017</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アンドレ・ジイド作品における日記の力

森 香織

## 1. 序

アンドレ・ジイドにとって、幼少のころから自己と他者についての問題は大きな関心事であった<sup>1</sup>。その為、彼の執筆の大きな目的の一つは、紙上で、登場人物達を用いた観察・実験をすることで、世界のあり方を把握することにあった。それを踏まえたうえで、その作品を見直してみると、登場人物達が、見る・話す・聞く・書くなど様々な行為を用いて、自己と他者の関係性や、彼らが作り上げる自己又は他者のイメージのあり方を、掌握・調整しようとしていることがわかる。よって本論では、その中から「日記を書く」という行為に注目し、その行為が作品中で登場人物達によって、いかに自己・他者のイメージ支配の道具として利用されようとしているか、そして実際その行為が彼らの関係性にいかなる影響を与えるかを考察し、日記の力について考える。

そもそもジイドという作家における日記というテーマは、ジイド研究者にとって重大な問題の一つである。というのもジイドは、生前に出版することを念頭に、作品の一形態として自らの『日記』を提示した最初の作家とみなされているからである。よってその『日記』は、彼の精神世界（人生観・宗教観・芸術観等）の独特さによってのみならず、エクリチュールの形態・方法によっても、多くの研究者の関心を引いてきた<sup>2</sup>。また、ジイドは作品自

---

<sup>1</sup> 1930年7月3日の日記や、8月2日の日記参照。

<sup>2</sup> 例えば以下の文献はジイドの『日記』について研究した代表的なものである。  
MARTY, Eric, *L'écriture du jour : le Journal d'André Gide*, Editions du Seuil, Paris, 1985、BARTHES, Roland, *Notes sur André Gide et son Journal*, Existences, n° 27, juillet 1942

体・作中両方において、小説・日記・自伝的小説・回想録・手紙等、様々な形態を取り入れ、その効果を試した作家でもある。よって、なぜその形態が採用されたのか、その形態によって作品にどのような影響があるのかということについても、多くの研究がなされてきている<sup>3</sup>。しかし、本論はその膨大な研究実績の末端に加わるべく、『日記』を通して作者の精神世界を論じるものでも、作者や作品にとっての日記と言う形態の意義や影響力を論じるものでもない。本論で考察するのは、あくまでも作品世界において、作中人物がいかにか「日記」という道具、もしくは「日記を書く」という行為を用いて、周囲の作中人物との関係性に働きかけるのか、またその結果、日記に彼らの関係性に対していかなる力が付与されるのかということである。

その為、今回扱う作品は、作品中にて、明らかに作中人物である人物が「日記」を書いているもの、即ち『田園交響楽』『女の学校』『狭き門』『贋金使い』に限り、ジイドの『日記』及び『贋金使いの日記』は扱いを控える。また、何をもって「日記」と呼ぶのかという問題については、フィリップ・ルジュヌヌの『自伝契約』で言及されている自伝・日記・回想録の違いについての考え方を基に、「journal」、「cahier」、「feuilles」という言葉で示されるエクリチュールの中で、一定の期間ごとに間隔を空けて継続的に書かれたことが明らかな回顧的なエクリチュールで、かつ全体を通して統一的視点・目的の欠如したものとする。この際、自伝または回想録との違いとして挙げられがちである、執筆時期と語られる出来事との時間的距離は、今回の「日記」の定義においては不問とする<sup>4</sup>。また、この定義はあくまでジイド作品にお

---

<sup>3</sup> 例えば以下の文献がそういった研究に当たる。

KEYPOEUR, David, *André Gide - écriture et réversibilité dans les Faux-Monnayeurs, les presses de l'université de Montréal*, 1980

<sup>4</sup> そもそも、この時間的距離は、どこまでが日記でどこからが自伝・回想録とすることができない点でも、時間的距離のあるものでも自伝や回想録ではなく、「日記」であるとみなした方が自然である事例（例えばジイドにおいては『田園交響楽』の牧師の回顧的なエクリチュール）があるという点でも、それを定義における絶対条件に含めることには限界がある。

いての「日記」の定義であり、その普遍性を説くものではない。

更に、本論で「真実の姿」「理想の姿」といった言葉を用いる際、あくまでこの表現は、当該人物が問題となっている瞬間に、「真実」・「理想」であると考えている自己または他者の姿のことを指すものとし、普遍的な「真実」や「理想」を想定するものではない。

以上の点を踏まえ、以下作中人物達が何を目的にどのような立場をとって「日記」を書き始めたかについて分類し、その目的と立場によって日記の持つ支配力や影響力にいかなる差異があるかを考察していく。

## 2. イメージ調整の為の日記 — 『田園交響楽』 —

『田園交響楽』の牧師の「日記」は、以下のような文章で始まる。

La neige, qui n'a pas cessé de tomber depuis trois jours, bloque les routes. (...)

Je profiterai des loisirs que me vaut cette claustration forcée, pour revenir en arrière et raconter comment je fus amené à m'occuper de Gertrude.

J'ai projeté d'écrire ici tout ce qui concerne la formation et le développement de cette âme pieuse, qu'il me semble que je n'ai fait sortir de la nuit que pour l'adoration et l'amour. Béni soit le Seigneur pour m'avoir confié cette tâche<sup>5</sup>.

自伝に「自伝契約」があるように日記にも「日記契約」というものがあるとするならば、牧師の日記のそれは、この部分に当たるだろう。自分はジェルトリュードの魂の成長と発達の様子、及びそこで演じた自らの役割を包み隠さず「全て」回想し、記録するためにこの日記をつけるという、目的と立場の表明がここでなされている。しかし、ある程度一定の精神状態と思想の下に、統一的な視点で自己のありかたの変遷を物語る自伝に対し、その時その時の執筆の瞬間によって精神状態や思考の変遷が見える日記において、そ

---

<sup>5</sup> GIDE, André, *La symphonie pastorale, Romains et récits, Œuvres lyriques et dramatiques Tome II*, édition publiée sous la direction de Pierre Masson, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean Claude, Céline Dhérin, Alain Goulet et Davide H. Walker, Bibliothèque de la Pléiade, 2009, p.3

の「契約」は簡単に破棄され、その日記が書かれる目的も、執筆者の立場も容易に変更される。実際牧師の日記は、最初の方こそジェルトリュードとの出会いやその教育の方法について語っているものの、その時系列は筆が進むにつれ乱れ、ジェルトリュードの成長や変化を追うのが難しくなる。また、第 2 の手帳に入ると彼女についての言及は明らかに数を減らし、牧師の家族についての愚痴とも言える描写及び自己の感情についての言及が大部分をしめることになる。

また、その書きぶりを見てみると、自分の言動は神が意思によるものであるから、正しいのだという主張<sup>6</sup>や、誰かを非難しているように見える部分は、相手の真実の姿がそうである以上、心外ではあるが仕方がなく、相手の「徳」への不理解・不寛容に対してあくまで自分は腹を立てているわけではない、とする表現<sup>7</sup>が何度も見られる。また、その他者への批判・愚痴を書く際に、相手の「本当の姿」というものを、自分は良く知っていると、何度も言うことによって、自分の非難の正当性を確保しようとする態度も散見される<sup>8</sup>。更には、牧師がいつかその日記が誰かに読まれることを想定し、その

---

<sup>6</sup>例えば以下のような部分がそれにあたる。

« Dieu mit en ma bouche les paroles qu'il fallait pour l'aider à accepter ce que je m'assure qu'elle eût assumé volontiers si l'événement lui eût laissé le temps de réfléchir et si je n'eusse point ainsi disposé de sa volonté par surprise. » (*Ibid*, p.8)

<sup>7</sup> 例えば以下のような部分がそれにあたる。

« J'ai trop souci de la vérité pour taire le fâcheux accueil que je dus essayer à mon retour au foyer. » (*Ibid*, p.6)

« Il m'est pénible d'avoir à dire que ces reproches me venaient d'Amélie ; et du reste, si j'en parle ici, c'est que je n'en ai conservé nulle animosité, nulle aigreur (...) » (*Ibid*, p.13)

<sup>8</sup> 例えば以下のような部分がそれにあたる。

« Je connais trop bien Amélie (...) » (*Ibid*, p.37)

« (...) connaissant son humeur et le tenant pour un de ceux que la discussion ne fait qu'obstiner dans son sens ; (...) » (*Ibid*, p.40)

ときの為にその語りに手心を加えようとしていることがわかる箇所もある<sup>9</sup>。

以上の点から、この牧師の日記がジェルトリュードの成長の記録であるというのは建前に過ぎず、自分が不当に晒されている非難に対し、公開弁護を試みることこそ、本来の目的であると考えられる。つまり、アメリーやジャックによって、「理想主義者」「家族を省みない薄情者」「自己認識のできていない人間」という自らの「偶像」が作り上げられていると感じた牧師が、「神の御心にのみ従い、何よりも「徳」や人間のあるべき姿を理解しており、家族の不寛容や無理解に晒されながらもそれを全うしようとする受難者」といった「真実の姿」を、彼の日記を読む人々に提示しようとしているのであり、この日記は、自己のイメージを調整することで、他者によって支配された関係性において自らの権力を回復しようとする為の、反逆の手段である。恐らく、アメリーやジャックとの関係において、「顔」を「見る」という行為において<sup>10</sup>も、「話す」という行為においてもそれをなし得なかった<sup>11</sup>牧師

---

<sup>9</sup> 例えば以下のような部分がそれにあたる。

« (...) je l'atteste solennellement pour le cas où plus tard ces feuilles seraient lues par elle. » (*Ibid*, pp.13-14)

« (...) celui qui par aventure lirait ces pages s'étonnera sans doute de l'entendre s'exprimer aussitôt avec tant de justesse et raisonner si judicieusement. » (*Ibid*, p.23)

<sup>10</sup> 牧師はアメリーの自分を哀れむような表情 (= 《顔》) を見ることによって、自らが「徳」を逸脱しつつあり、しかもそれを認めまいと強情を張っているという「真実の姿」に気づき、以後そうした自らの姿と折り合いをつけるようと苦心することとなるが、それは即ちアメリーによって突きつけられた自分の姿から脱却ができないことの苦悩であり、アメリーとの関係性において、牧師が彼女の支配化に入っているということである。「顔」を「見る」という行為がいかにか自己と他者との関係性において機能するか、また「顔」、『顔』、《顔》の区別については、本論筆者の以下の論文を参照。

森 香織、『アンドレ・ジイドにおける「顔」を巡る闘争』、慶應義塾大学フランス文学研究室紀要第18号、2013年。

<sup>11</sup> アメリーとの会話について、牧師はお互いの言葉は、「隔壁の抵抗を思い知らせるボーリング機の音のように悲しげに響く」 « sonnent plaintivement comme des coups de sonde pour nous avertir de la résistance de cette cloison séparatrice » (GIDE,

は、最後に「書く」という行為によってその反逆を試みたのであろう。

しかし、その熱弁にも関わらず、その言葉は結局虚しく響くこととなる。何故なら、まず、アメリーやジャック、もしくはそれ以外の第三者がその日記を読んだとして、上記のような弁明の色濃い書き方によって、牧師の読者におもねようとする媚のようなものを読者は感じるだろう。そのため、日記にある程度期待されるべき「誠実さ」«sincérité»が疑問に付されるからである。次に、その「告白」によって明かされる内容の中で、牧師の姿、その精神の運動について新しい点は何もないからである。というのも、牧師がジェルトリュードに抱いている愛情の種類や、彼の説く理想が引き起こすであろう軋轢や悲劇について、アメリーやジャックはわかっていたこと、そして「現実」を認めまいとする牧師の逃避や自尊心や、それを隠したり弁明したりする自己防衛への志向性も、すべて承知の上であったということが、彼らの発言からうかがい知ることが出来るからである。よって、牧師がいかにして当時の自らの姿を弁明しようとしても、その内容も方法も、アメリー達にしてみれば、読まずして容易に察しが付くものであり、例え読んだとしても、何の感慨も引き起こさないばかりか、逆に彼のイメージを堅固なものとするだけである。

こうして建前の「日記契約」に始まり、気取りによって粉飾されたこの牧師の日記は、自己のイメージを調整し、新たな権力をアメリー達に対して振るうべく書かれたものであるにも関わらず、何の権力も影響力ももたらさず、その行為は無へと帰すであろう。

### 3. 観察と実験結果の記録の為に書かれた日記 —『贖金使い』—

さて、では他者との関係性に直接的に影響を及ぼすべく、他者に向けて書かれた日記が無為に終わるとするならば、他者の目とはほぼ無縁な状態で書かれたと思われる日記についてはどうであろうか。そうした日記の代表例が、『贖金使い』のエドゥアールの日記（特に第一部のもの<sup>12)</sup>）である。

---

*La symphonie pastorale*, p.30)だけであると認めている。

<sup>12)</sup> 第三部の日記においては、エドゥアールはベルナルに再び読まれることを

エドゥアールの日記には、『田園交響楽』の牧師のそのような「日記契約」に該当するものは見受けられない。何故なら、『贖金使い』の中で彼の日記は途中からしか紹介されず、大抵の場合「日記契約」が記されていると思われる冒頭部分は省略されてしまっているからである。しかし、その内容から予想することは可能であろう。彼の日記の内容は、大きく分けて三つに分類される。まず、ローラやオリヴィエに対して抱いている自らの愛情の分析及び自らの精神運動についての考察、次に、文学論・芸術論及びこれから書こうとしている小説のあるべき姿についての思索、そして周囲の人々の言動・出来事の記録の三つである。こうした要素によって構成される日記は、他者を観察・実験材料として扱いがちなエドゥアール<sup>13</sup>による、実験結果の観察記録の様相を帯びていることがわかる。つまりこの日記は、次の作品を書くまでの間の書かない／書けない罪悪感や無力感を慰める為の代償行為であると共に、執筆活動の練習と資本の蓄積の場である。言い換えれば、エドゥアールの日記は、自己にも他者にも何かしらの影響を及ぼすことを目的とした日記ではないといえる。

実際、「自己拡散の反エゴイズムの力」« force antiégoïste de décentralisation

---

想定して、以前に書いたことに対して自己弁護を行っていると思われる部分が出てくる。例えば第三部第二章における次のような記述がそれである。

« Je relis ce que dessus. En parlant ainsi d'Azaïs, c'est moi que je rends odieux. Je l'entends bien ainsi ; et j'ajoute ces quelques lignes à l'usage de Bernard, pour le cas où sa charmante indiscretion le pousserait à fourrer de nouveau son nez dans ce cahier. Pour peu qu'il continue à fréquenter le vieux, il comprendra ce que je veux dire. J'aime beaucoup le vieux et, " au surplus " comme il dit, je le respecte ; mais dès que je suis près de lui, je ne peux plus me sentir ; cela me rend sa société assez pénible. » (GIDE, *Les faux-monnayeurs, Romains et récits, Œuvres lyriques et dramatiques Tome II*, p.35.)

<sup>13</sup> 語り手 « je » によってエドゥアールの行動原理は次のように分析される。

« Chaque être agit selon sa loi, et celle d'Édouard le porte à expérimenter sans cesse. Il a bon cœur, assurément, mais souvent je préférerais, pour le repos d'autrui, le voir agir par intérêt ; car la générosité qui l'entraîne n'est souvent que la compagne d'une curiosité qui pourrait devenir cruelle. » (*Ibid*, p.337)



<sup>14</sup>»についての分析ひとつとっても、その分析が、その作用を容易に起こす（他者からの影響・支配を受けやすい）不安定な自己を「核」« centre »に留め、自己統制力を強める為に使われることはない。エドゥアールは以前、ローラに対して結晶化をしたり、他者が期待する偶像に向けて自己を折り曲げる努力をしたりしていたわけだが、日記においてそれが分析された後でも、相変わらず彼は、他者に対して（特にオリヴィエに対して）同じように結晶化と自己拡散を行い続ける。また、環境を操作することで起こる特定の人物に引き起こされる作用や結果への好奇心の為に、自らを誤魔化したり悲劇の可能性に目を瞑ったりする癖についても同じである。ローラの結婚に際しての自らの欺瞞を日記に書き留めておきながら、しかもローラの悲劇を知った後にそれを読み直すことで、その原因が自分にあるということを自覚しておきながら、ボリスの場合にもその経験が生かされることはなく、彼は同じ過ちを犯し続ける。エドゥアールにとっては、「日記を書く」という行為は、そのあり方においてなんら影響力も支配力も持たない、ジイドが言うところの書くという行為の「逆作用」« rétroaction<sup>15</sup> »を持たないものである。

しかし、ベルナルルによって読まれるとき、その日記は彼に対して非常に大きな力を奮うこととなる。そのときの反応は以下の通りである。

Bernard, à mesure qu'il avançait dans sa lecture, s'étonnait toujours plus, admirait toujours plus, mais un peu douloureusement, de quelle diversité se montrait capable cet ami qu'il croyait connaître si bien. Olivier ne lui avait rien dit de tout ce que racontait ce journal. (...) À l'immense curiosité qui précipitait sa lecture, se mêlait un trouble malaise : dégoût ou dépit. (...) Cela peut mener loin ce dépit-là, et faire faire bien des sottises ; comme tous les dépits, d'ailleurs<sup>16</sup>.

Et il apparaissait à Bernard tout d'un coup qu'il était seul encore, grâce à la double confiance de son ami et du journal d'Edouard, à connaître la double face de

---

<sup>14</sup> *Ibid*, p.225

<sup>15</sup> GIDE, *Journal Tome I 1887-1925*, Bibliothèque de la Pléiade, 1996, p.40

<sup>16</sup> GIDE, *Les faux-monnayeurs*, p.259

*l'intrigue. C'était un avantage qu'il ne conserverait pas longtemps ; il s'agissait de jouer vite, et serré. Son parti fut pris aussitôt : sans oublier du reste rien de ce qu'il avait lu d'abord, Bernard n'eut plus d'attention que pour Laura*<sup>17</sup>.

彼は、エドゥアールの日記により、今まで知らなかった友人の姿を知り、一種の口惜しさ « *dépit* » を感じるが、その口惜しさは、人々に愚かな行為 « *sottise* » を起こさせ、予想外の結果を齎す力を持つものである。実際、彼はこの後その口惜しさの為にエドゥアールの秘書としてオリヴィエが占めるべきであった立場を横取りするという軽挙に出る。（恐らくその口惜しささえなければオリヴィエを傷つける行動は控えたと思われる。）また、その日記を読む前は、反逆者として生きることを志したにも関わらず、読んだ後はローラへの絶対的服従を誓うという全く逆の生き方を選択したことを考えれば、この日記はベルナルにとって、それまでの彼とは全く違う遠方へ彼を引きずっていき、彼とその周囲の人々の人間関係に大きな変化を与える力を持つものであるといえる。

しかし、ここで注目しなければならないのは、彼を惹きつけ影響を及ぼしたのが、あくまで今まで知らなかったオリヴィエの姿、ローラの悲劇というエドゥアールの日記の中の「筋」« *intrigue* »の部分、外的事件の描写であり、ドゥアールの間観や芸術観といった思考のあり方や、エドゥアールの精神的運動のあり方自体ではないということである。つまり、この日記はベルナルにとって、ただ知らなかった世の中の一面を覗く為の窓という役割しか持たず、エドゥアールという人物の声がその中に生きることはなく、エドゥアール自身からの影響というものをこの日記を介して受けてはいないのである。『田園交響楽』の牧師の一方通行で虚しく響くだけの声に比べ、エドゥアールの声は、そこに描かれている人物像がベルナルによって今まで知らなかった「本当の」姿として信じられ、その真実らしさを疑われていないという点で、説得力を持っている（「誠実さ」が確保されている）ということとは認めなければならないし、またその「誠実さ」の保証によってこそ、べ

---

<sup>17</sup> *Ibid*, p.267

ルナールに行動を起こさせる力というものが発生するのであるが、エドゥアールが嘗てローラから受けていたような、他者に侵略し、作りかえるような力(支配力)がその声には付与されない。この様に、人間観察の記録として、執筆の鍛錬の場として書かれたこの日記は、例えその目的が果たされていたとしても、自己と他者という関係性への影響という点で考えると、「日記」という秘密を打ち明ける物体としては多大な影響力を持ちえるが、「日記を書く」という行為及びそれを要請する精神活動の軌跡としては、自己と他者の中で繰り広げられる「偶像」と「真実の姿」というイメージの押し付け合いという抗争の中において、ほぼ無力であるといえるだろう。

#### 4. 自己鍛錬の具としての日記・遺される日記—『狭き門』・『女の学校』—

さて、ここまで牧師とエドゥアールの日記を見てきたが、自己と他者の抗争においてその力が発揮されることはなかった。しかし、中には特定の相手とのその抗争において、その関係性を変え、相手に対して徹底的に支配力を振るう契機または道具としての役割を担う日記がある。それが、『女の学校』のエヴリーヌの日記であり、『狭き門』のアリサの日記である。この二つの日記は書かれている内容やその精神風土は全く異なるものであるが、日記の目的と効果において数々の類似点がある。今回は、議論の簡潔化を図るため、主にアリサの日記について考察を行う。

まずは、『田園交響楽』の牧師の日記の際と同じようにその「日記契約」についてみていくこととする。

N'ayant aucun souci du ménage ni de la cuisine, dans le léger désœuvrement qui s'ensuit, ce 23 mai 188., jour anniversaire de mes vingt-cinq ans, je commence un journal – sans grand amusement, un peu pour me tenir compagnie ; car, pour la première fois de ma vie peut-être, je me sens seule (...)<sup>18</sup>.

---

<sup>18</sup> GIDE, André, *La porte étroite, Romains et récits, Œuvres lyriques et dramatiques Tome I*, p.891

ジェロームが傍らにいない孤独に耐えるため、そしてその無為の時間を埋めるための話し相手として書き始められたこの日記は、見たもの、感じたことを書き留める内省的な記録になるであろう。実際、その内容を見てみれば、周りの景色から感じたこと、ジュリエットの幸福について抱いている感情、ジェロームへの愛情や執着についての記述で占められており、その描き方も、牧師のように説明的でもエドゥアールの用に分析的でもなく、情動豊かなものである。しかし、書き進められるにつれ、その目的と立場は徐々に変化の兆しを見せ、以下のような記述が散見されるようになる。

Combien cette analyse de ma tristesse est dangereuse ! Déjà je m'attache à ce cahier. La coquetterie, que je croyais vaincue, reprendrait-elle ici ses droits ? Non : que ce journal ne soit pas le complaisant miroir devant lequel mon âme s'apprête ! Ce n'est pas par désœuvrement, comme je le croyais d'abord, que j'écris, mais par tristesse. La tristesse est un *état de péché*, que je ne connaissais plus, que je hais, dont je veux *décomplicquer* mon âme. Ce cahier doit m'aider à réobtenir en moi le bonheur.

(...)

Je voudrais me garder de cet insupportable défaut commun à tant de femmes : le trop écrire. Considérer ce cahier comme un instrument de perfectionnement<sup>19</sup>.

アリサは、本来自分の為に書き始めたであろう日記に、ジェロームの目(または神の目)を気にしての「気取り」・「媚」«*coquetterie*» や、「良く書こうという配慮」«*souci de bien écrire*» ( *Ibid*, p.898) が出来ていることを感じ、ジェロームの為に、またはジェロームに宛てて書くのではなく、「真実の自分」が思ったことをそのままに書き、自らの魂の救済と自己完成の為の道具として「日記を書く」という行為をすべきだと何度も書く。しかし、それは最初の目的と立場に立ち返ろうとしているようで実は、その使用の仕方が変わっている。というのも、徐々に日記の内容は、ただ目的もなく脈絡もなく見たり感じたりしたことの記述ではなく、「徳」から逸脱しようとする

---

<sup>19</sup> *Ibid*, p.893

自己への困惑や罪悪感、戒めの言葉に占められるようになるからである。つまり「書く」という行為を「徳」を目指す為の精神的な鍛錬として使用するようになっている。実際その後の文章には、素直な感情に反して「徳」を追う様自らを叱咤激励・鼓舞する文章が神への祈りという形をとっていくつも登場する<sup>20</sup>。つまり、「日記を書く」という行為によって、彼女は自分自身を支配・制御しようと試みたのであり、実際結果を見ればその効果は十分にあったと思われる。そうした支配力の利用は、ジェロームがアリサに対して起こしている結晶化作用を偽りの自己を作り上げることで故意に解消させ、ジェロームの「徳」の目的である自分自身を消し去ることで「徳」を「完成」させた後にも継続される。その後の日記では、犠牲にした彼への愛情の噴出が見られ、そのほとんどが彼を請い求める言葉で埋め尽くされているが、それらの言葉は、彼女の生前決してジェローム本人に届かず、ジュリエットや父親にも語られることはない。つまりアリサは喉下まで出掛かったそれらの言葉を日記という吐き出し口に吐き出すことによって、周囲の人々から隠し、「徳」に邁進することができたのであり、「日記を書く」という行為によって、「徳に背く」行為へ進もうとする自分を制御・支配したのである。一言で言えば、アリサの日記は、アリサにとって、自己鍛錬と自己制御の為の道具であり、その目的通り、その日記は書かれることで彼女に対する支配力を行使するものである。

『女の学校』のエヴリーヌの日記に関してもこれと同じ目的と効果（支配力）が見られる。結婚前の日記（『女の学校』第一部）は、徐々にロベールの虚栄を感じ取り始める自分に対して「ロベールの立派な行為に心酔する従順な妻」という「あるべき姿」であり続ける為の道具として使われ、実際し

---

<sup>20</sup> 例えば次のような箇所がそれに当たる。

Je comprends qu'il faudrait donner aux pauvres ce cœur dont je ne dispose que pour Jérôme. Et du même coup n'est-ce pas lui enseigner à faire de même?... Seigneur, donnez-moi ce courage. (*Ibid*, p.898)

Plus que deux moi pour parachever cet ouvrage... Ô Seigneur, aidez-moi ! (*Ibid*, p.899)

ばらくの間、「日記を書く」という行為は彼女を「あるべき姿」にとどまり続けさせるという力を発揮する。また二十年後の日記(『女の学校』第二部)も、そこにロベールへの非難や自らの立場への嘆きを吐き出すことで、本来ロベールに見切りをつけ、自立して思うままに行動したいという感情を押さえ込む道具となっており、「日記を書く」という行為が、自由を志向する彼女に対して「耐え忍ぶ妻」という役割の中に拘束する力を発揮している。

さて、彼女たちの日記は、自らに対して支配力を奮うのみならず、彼女たちを取り巻く人物との関係性においても、大きな力を持ち、彼女たちに相手への権力を授けるものとなっている。アリサの死後、そしてその日記がジェロームによって読まれて十年以上たった後、ジェロームとジュリエットの間で以下のような会話が交わされる。

« Quel bon père de famille tu ferais ! dit Juliette en essayant de rire. Qu'attends-tu pour te marier ?

— D'avoir oublié bien des choses ; — et je la regardai rougir.

— Que tu espères oublier bientôt ?

— Que je n'espère pas oublier jamais.

(...)

« Asseyons-nous, dit-elle en se laissant tomber dans un fauteuil. Si je te comprends bien, c'est au souvenir d'Alissa que tu prétends rester fidèle. »

Je fus un instant sans répondre.

« Peut-être plutôt à l'idée qu'elle se faisait de moi... (...)»<sup>21</sup>

ジェロームは、最早女性を愛することもできず、アリサが望んだジェローム像に忠実に生きている。つまり、アリサが作り出した「神のみを人生の目的とする徳高きジェローム」というイメージに拘束され、支配されたままである。その支配力は、アリサの日記によって彼女が本当に望んでいたことが明らかにされた(ジェロームはその日記に描かれたアリサの姿が「真実の姿」であるということ、つまりその日記の「誠実さ」を疑っていない) から行

---

<sup>21</sup> *Ibid.*, pp.907-908

使されるものである。しかしそれ以上に、故意にジェロームに読ませる為に遺されたその日記が、アリサが如何に彼の「徳」の為に悩み苦しみ、犠牲を払ったかの告白であり、アリサの命という生贄を交換条件にその望みを叶えることを誓わされる一方的な契約の証書のようなものだからである<sup>22</sup>。この死者との契約書によってジェロームは、アリサによって作り変えられ、永遠に彼女の支配下で生きることになるのである。

エヴリーヌの場合においても、彼女の日記はその死後娘によって公開されるが、『ロベール』において、ロベールはその日記の公開が彼に「物質上、精神上的の損害」« préjudice matériel ou moral <sup>23</sup> » を引き起こしたと言っている。そして、「妻が描いたような出鱈目で空虚でくだらない人物の中に、自分を認める気になれないのは、私だけではない」« je ne suis pas le seul à ne consentir point à me reconnaître dans l'être inconséquent, vain, sans importance, que ma femme a peinte<sup>24</sup> » と実際の人物と評判が違うということを強調しなければならないということは、エヴリーヌの日記の公開後、彼は「出鱈目で空虚でくだらない人物」という風にその読者から見なされた（＝彼女が「真実」を書いていると見なされた、つまり「誠実さ」が保証された）ということであり、彼女が描いた「偶像」に彼が支配されたことを物語るものである。そしてロベールは自らの反駁の書も、虚飾にまみれた自己弁護にすぎないと

---

<sup>22</sup> 以下の部分でアリサは、日記の中に彼女の感情や思考内容そのものではなくてその苦悩する精神の揺れ動きをジェロームに感じ取ってもらうことで彼を「徳」に向かわせたいのだとはっきり述べている。

À l'instant de jeter au feu ce journal, une sorte d'avertissement m'a retenue ; il m'a paru qu'il ne m'appartenait déjà plus à moi-même ; que je n'avais pas le droit de l'enlever à Jérôme ; que je ne l'avais jamais écrit que pour lui. Mes inquiétudes, mes doutes, me paraissent si dérisoires aujourd'hui que je ne puis plus y attacher d'importance ni croire que Jérôme puisse en être troublé. Mon Dieu, laissez qu'il y surprenne parfois l'accent malhabile d'un cœur désireux jusqu'à la folie de le pousser jusqu'à ce sommet de vertu que je désespérai d'atteindre. (*Ibid*, p.905)

<sup>23</sup> GIDE, Robert, *Romains et récits, Œuvres lyriques et dramatiques Tome II*, p.649

<sup>24</sup> *Ibid*, p.649

読者に断じられる可能性を感じている。(実際『ロベール』を読む我々のうちにもそう感じる人は少なくはないだろう。) それほどにエヴリーヌによって遺された日記は、ロベールに対して強力な力を奮い続けるのである。

## 5. 結び

以上ジイド作品において、自己のあり方や他者のイメージに日記がいかなる影響を与え、そのイメージ支配をめぐる抗争において、いかなる力がいかなる場合にどの様に発揮されるのかを考察した。その結果、日記が他者との権力関係における支配力を発揮しえるためには、いくつかの条件が必要であることがわかった。第一に、その日記作者の「誠実さ」が保証されていると読者が感じること<sup>25</sup>、第二に、読者にとって新しい事実や心情が告白されていること、第三に、「日記を書く」という行為自体が執筆者自身に何かしらの影響を及ぼす可能性があること、もしくはそれを執筆者が期待していること、そして最後に、その日記が死後に読まれることである。牧師の日記は、

---

<sup>25</sup> 「誠実さ」が保証される条件としては、第一に複数の対立する観念、もしくは「理想の自己と「現実の自己」の狭間で揺れ動く精神の運動の軌跡等が描かれていること、第二に、最初の「日記契約」がその時点において率直なものであると受け止められること、第三に、書き進むにつれて執筆態度や立場が最初の「日記契約」から逸脱している場合にも、その差異や変化に意図的な欺瞞や媚が感じられず、「書く」という行為の「逆作用」や実生活からの影響による自然な変化であると感じられること、の三つが考えられる。また、「日記契約」について更に言及すれば、「自伝契約」と同じようにその著作が「日記」であり、語り手が著者と同一であることを保証する役割は担うものの、これから語る物語をいかなる目的と視点から語るかを表明し、それが著作全体を通して一貫していることが期待されるという「自伝契約」の役割は担わない。時間の経過に伴う目的や視点の流動性こそが「日記」の特質である以上、「日記契約」はあくまで執筆開始当初の態度であり、その内容と続く語りの実態と間の差異や変化によって浮き彫りになる著者の無意識の心の動きこそが、その日記本来の目的と立場とを明らかにするからである。要するに「日記契約」とはそれから物語られる自己という曖昧な存在の輪郭を探る旅の基点である。



第三の条件のみしか満たしていない為、その日記は無力に等しくその行為も無為であり、エドゥアールの日記は第一と第二の条件は満たしているが第四の条件は満たさず、第三の条件については疑わしい為、中途半端な力しか持ち得なかったといえるだろう。つまり、それを提示しさえすれば誰でもその抗争に参加する手段として使えた「顔」、もしくは「見る」という行為に比べ、日記という道具、もしくは「日記を書く」という行為は、極めて限定的な場合に、そして死者の遺書としてのみ、その抗争へ参与し抗う手段として用いることが可能だということである。ここには、ジイドにおける悲観的宗教観が影響していると考えられる。つまり、我々人間が常に行っている他者とのイメージ支配をめぐる闘争は、神の奸策によるものであり、たとえ一度その抗争において支配権を握ったとしても、次の瞬間にはその力を奪われ、生きている限り永遠に神に弄ばれ続けるのだといった宗教観である。テゼが、人々を酩酊させ攪乱するミノタウロスの迷宮を脱出するには、アリアドネの糸を頼るか翼を授かって空を飛ばしか方法がない。つまり、義務を背負い誰かの支配下に甘んじるか、死して地を離れるかである。

そもそもディディエが指摘する<sup>26</sup>ように、「日記を書く」という行為自体、様々な矛盾とコミュニケーションの不可能性の象徴でしかない。そう考えるとき、ジイドにとって日記とは、作品に多角的な視点を導入する為といった技術的な目的に資す道具であると同時に、作家の力の限界を表象する道具であり、永遠に他者との権力闘争から抜け出せない自己及び人間に対する嘆きを噴出させる場であったと言える。ならば、ジイドが『日記』を生前に出版し、小説や自伝的小説によって自らが被った不理解への抗弁の道具としたのも、『日記』がその目的を達成しないことを見越した上で、敢えてその無力性を提示する為だったのかもしれない。そして、『日記』以外でも様々な語りの形態を用いて自己を何度も語りなおしたのも、『日記』自体では無力な声を増幅させる為だったのではないかとさえ考えられる。

---

<sup>26</sup> ベアトリス・ディディエ、『日記論』、西川長夫・後平隆・共訳、松籟社、1987年。